

## 吾等の志

## 一 神武会は政党に非ず

神武会は断じて政党でない。従つて其の運動は政党運動でない。それは実に純乎として純なる一個の国民運動である。吾等は新たに一党一派を立て、一党一派の力を以て現存勢力を倒し、然る後に己れ自ら之に代らんとする意図を以て神武会を組織したのではない。それは国民全体の力を以て現存勢力を倒し、国民全体の力を以て建設に当たらんとする目的の下に国民を糾合動員せんとするものである。

日本内外の危機は刻々に切迫しつつある。機運まさに一転せんとし、乱兆すでに歴然として、形勢は朝に夕を測り得ざる今日に於て、何人が起つて采配を振らうとも、いま新たらしく結成せらるる一個の党派が、単独に既成勢力を倒し、単独に交後の乱局を收拾するだけの偉大なる勢力を、急速に築き上げ得るものとは到底考へられない。少くとも神武会は、左様な白日の夢を描いて居らぬ。

## 二 神武会の目ざすところ

然らば神武会は何をしやうといふのか。神武会は先づ国民に向つて、日本の理想と現実とを明確に説明する。国民は日本の理想の遠々として高きを知り、而して日本の現実が如何に低劣悲惨なるかを知るであらう。神武会は更に国民に向つて、日本を此の低劣悲惨なる境地に陥れたる万惡の源が、何処にあるかを精確に指摘する。国民は此の万惡の源に対して憤りを抱き、必ず之を打倒せずば止まぬ覺悟を定めるであらう。神武会は普く日本国民の間に、斯くの如き覺悟を抱く同志を求め、その堅確なる結束によつて國家革新の國民運動を起さんとするものである。

吾等の革新運動は、外國の先蹤を追ふものでない。また抽象的なる理論に拠るものでもない。吾等は異邦の实例を参考し吟味もしまた暗示をも得るであらう。吾等は博く学び篤く思い濃やかに慮るであらう。而も吾等は日本革新の原理を断じて外に求めず、實に「日本」其者のうちに求める。そのために吾等は、日本をして真個の日本たらしめ得る力を、先づ吾等の魂に復興せしめねばならぬ。而して日本をして真個の日本たらしめ得る偉大にして高貴なる力は神武建国の精神に外ならぬが故に、此の莊嚴なる精神に拠つて立つ國体なることを簡明直截に示すために、吾等の会を『神武会』と名づけた。

### 三 國家改造の第一歩

神武会のめざすところが、國民運動による國家の革新に在るとして、然らば如何なる方法を以て其の目的を遂げんとするか。

神武会は、一個の、然り唯だ一個の政策の断行を追求することによつて、國家改造の第一歩を進める。その一個の政策は、少くとも塗炭に苦しむ國民が切實に之を要求し、その断行によつて疾苦を和げ得るものなること。第二には其の断行がやがて順次に國家諸機構の根本的改革を誘導する性質のものたるべきこと。若干の例を挙げれば、小泉三

# 月刊 日本

毎月三十一日 十時正發行  
 定価 毎月五円  
 小売 六分  
 郵費 別  
 東京市神田區下町一丁目  
 行方所 北野ビル三階  
 神武會本部

## 神武會大綱

### 趣旨

は其の窮乏、勞働者の貧困、失業の増大に、到るころは是れ生活の惨苦に呻吟するのみならず、外は國際的地位に危くして、四面楚歌を聞く、君國內外の窮乏、實に累卵の危きよりも危きに拘らず、國務の重責に任ずる政黨政治家は、黨利黨名を以てしてまた憂國の誠なく、金融産業を支配する政商財閥は、私利私欲に専らにして毫も愛民の情がなからず、思想は動亂を極めて居る、階級闘争は深淵を加へつゝある、日輪の轉るるに、吾等は天下の事ならず、日々に昇るるも、民庶の時は即ち奮起の時、死の時、即ち死の時、水鏡を以てして、吾等は日本の前途を憂ふ、其時でなければならぬ。

### 主義

一、神武建國の精神を宣揚し、誠忠を皇室に誓ひて神聖なる國體を無窮に維持し、天業を四海に擴張するの覺悟を堅持し、先づ有色民族の解放及び指導に立じ、更に世界の道義的統一に向つて努力進歩す。

### 綱領

一、日本建國の精神、日本國家の本質、及び國民的理想を闡明し、本主義客を顛倒せる形式的教育の弊風を改革し、眞個の日本國民を育成すべき皇國的教育組織の實現を期す。

一、天皇親政の本義に則り、黨利を主として國策を従はざる政黨政治の陋習を打破し、億兆心を一にして天業を四海に擴張すべき皇國的政治組織の實現を期す。

一、一億萬民の國風に基き、私利を主として民福を従はざる資本主義經濟の弊取を排除し、全民の生活を安定せしむべき皇國の經濟組織の實現を期す。

### 規約

- 第一條 本會ハ神武會ト稱シ盡忠報國ノ日本國民ヲ以テ組織ス
- 第二條 本會ハ神武建國ノ精神ニ基キ皇國的理想ヲ實現スルヲ以テ目的トス
- 第三條 本會ハ會頭ヲ推戴シ本會一切ノ行動ヲ統轄セシム
- 第四條 本會ハ會頭任命ノ理事數名ヲ置キ會務ヲ處理セシム
- 第五條 本會ハ各地ニ支部ヲ設ケ數個ノ支部ヲ聯結シ支部聯合會ヲ置ク
- 第六條 支部及ヒ支部聯合會役員ハ推薦ニ據リ會頭之ヲ任命ス

第七條 本會々費ハ月額金拾錢トス

第八條 本會々員ハ機關紙及ヒ本會出版物ヲ配布ヲ受ク

第九條 本會々員ハ理想日本國民トシテ行動スル義務ヲ有ス

第十條 本會々員ニシテ日本國民タル體面ヲ汚損スルモノハ除名ス

### 行地社同人諸君に告ぐ

行地社代表大川周明氏が、此度復されて神武會々費となつたので、在京門人諸君の上、行地社機關紙月刊「日本」を神武會に提供し、行地社の機關紙ならしむることにした。茲に同人諸君の諒解を乞ふと共に、神武會發展のために一層の援助を賜はらんことを併せて乞ふ次第である。

昭和七年五月

### 行地社本部

支部設置に就て  
 一、本會の如く神武會が全國に其の第一の任務を擔ふべきが、本部の未だ確立するに先づいて、支部の設置を以て其の第一の任務とする。故に本部の設置と同時に、各地に支部を設置することを期す。

二、支部の設置は、本會の精神を維持し、天業を四海に擴張するの覺悟を堅持し、先づ有色民族の解放及び指導に立じ、更に世界の道義的統一に向つて努力進歩することを期す。

三、支部の設置は、本會の精神を維持し、天業を四海に擴張するの覺悟を堅持し、先づ有色民族の解放及び指導に立じ、更に世界の道義的統一に向つて努力進歩することを期す。

四、支部の設置は、本會の精神を維持し、天業を四海に擴張するの覺悟を堅持し、先づ有色民族の解放及び指導に立じ、更に世界の道義的統一に向つて努力進歩することを期す。

五、支部の設置は、本會の精神を維持し、天業を四海に擴張するの覺悟を堅持し、先づ有色民族の解放及び指導に立じ、更に世界の道義的統一に向つて努力進歩することを期す。

六、支部の設置は、本會の精神を維持し、天業を四海に擴張するの覺悟を堅持し、先づ有色民族の解放及び指導に立じ、更に世界の道義的統一に向つて努力進歩することを期す。

七、支部の設置は、本會の精神を維持し、天業を四海に擴張するの覺悟を堅持し、先づ有色民族の解放及び指導に立じ、更に世界の道義的統一に向つて努力進歩することを期す。

八、支部の設置は、本會の精神を維持し、天業を四海に擴張するの覺悟を堅持し、先づ有色民族の解放及び指導に立じ、更に世界の道義的統一に向つて努力進歩することを期す。

九、支部の設置は、本會の精神を維持し、天業を四海に擴張するの覺悟を堅持し、先づ有色民族の解放及び指導に立じ、更に世界の道義的統一に向つて努力進歩することを期す。

十、支部の設置は、本會の精神を維持し、天業を四海に擴張するの覺悟を堅持し、先づ有色民族の解放及び指導に立じ、更に世界の道義的統一に向つて努力進歩することを期す。

申翁が力説する金貨改鑄も其の一つ、農村モラトリウム断行も其の一つ。

一切の国民運動は、単一明瞭にして而も根本的性質を帯びたる目標を掲げて進むことによつてのみ成功する。他山の石としてはレーニンの実例あり、ムッソリーニの実例あり、乃至ヒットラーの実例もある。彼等が急速に民心を集め得たのは決して別策あつたのではない。レーニンは唯だ土地を与へるといふ約束により、ムッソリーニは凱旋兵士に土地と仕事とを与へよといふ要求により、ヒットラーは賠償不払の主張によつて、その勢力を急激に築き上げたのである。この運動行程は、日本に於ても同様でなければならぬ。

加ふるに斯くすることのみが、国家の全般的改革を遂行する唯一無二の路である。若し諸多の政策を案出し同時に之を行はうとするならば、左右杆格し前後撞着して、ついに孰れの一つをも行ひ得ず、唯だ同一処に足踏みするのみで、進歩することが不可能となる。極めて具体的なる政策を掲げ、最も精密なる計画を標榜せる改革運動が、その政策と計画とに囚はれて、却つて改革断行のいとぐちを失ひ、そのために民衆の失望を買ひ、失望は反感を招き、反感は反抗に転じて、ついに反動勢力のために転覆せられたる実例は隨処に之を見ることが出来る。改革は先づ一個根本的政策の断行から始められねばならぬ。然る時は必然他の諸々の機構が改革を余儀なくされる。

#### 四 国民全体の努力

神武会は国民運動の醜態となり、諸改造団体と相結び、単一根本政策の断行を見るまで徹底して戦いぬく。何人又は何党が之を断行しやうとも、それは吾等の問ふところでない。吾等の期するところは、一日も速やかに先づ其の根本政策の断行を見ることである。而して其の断行に伴いて、否応なく迫られる諸機構の根本的改造は、決して一党一派の能くするところに非ず、必ずや国民総がかりで遂行しなければならぬ。神武会は国民の努力を正しき原理に



立てる正しき方向に集注せしむべく、監視し指導しなければならぬ。

例へば農村モラトリウムを断行したと仮定する。日本の金融制度は、否が応でも改革せねばならぬこととなる。この改革は国民のうちの金融方面に於ける有能者が、新国家の根本方針と根本原理とに従ひ、一切の利己的乃至党派的立場を離れて協力することによつてのみ可能である。金融制度の根本的改革が、惹いて産業各部門の改革を余儀なくすることは是れ亦言をまたない。而して此の改革に当りても、産業各部門に於ける有能者の協力を求めねばならぬ。かくして国内の諸機構が、その全部に亘り、つぎつぎに改造されて行くであらう。そは一党一派が、自己の功名を収めんとして行ひ得る仕事ではない。まさしく全国民の総努力による無私の奉公によつてのみ成就し得ることである。この根本方針並びに運動方法に於て、神武会はムッソリーニやヒットラの運動と截然その本質を異にする。吾等は日本に於てムッソリーニ又はヒットラの如き運動、即ち一個の新しき政党運動による改造の可能を信じない。

## 五 如何に改革するか

然らば神武会は如何なる範囲に於て、また如何なる程度まで日本国家の諸機構を改造せんとするのであるか。此の点に就て吾等に好個の教訓を与へるものは欧羅巴戦争以後二十年に垂んとする世界政治の経験である。

集 論 ヨーロッパに於て最初に革命を敢行せるはロシアである。ロシアは、戦時共産主義の名を以て呼ばるる極端なる改革を先づ断行した。数年の経験は其の続行を不可能ならしめた。ロシアは先づ新経済政策によつて右傾し、更に新新経済政策によつて大いに右傾し、次でスターリンの国家社会主義によつて一層右傾した。戦時共産主義時代のロシアと今日のロシアとを比較すれば、殆ど別国の観あるほど左より右へと移つて来た。

翻つてロシア以外の列強の政治を觀れば、たとへ共産主義を弾圧すること峻厳を極めて居るとは言へ、その實際の

政策は次第に左に向つて進み、例へばドイツの如き、相続税の最高率は実に六割である。掲ぐる旗こそ赤白相容れざれ、その実地に行ふところを見れば、露独の相距ること実は数十歩に過ぎない。恰もフランス革命以後、幾多の波瀾曲折ありとは言へ、君主国たると民主国たるとを問はず、実際の政治機構は殆ど同一轍に帰したやうに、諸国の経済機構もやがて左右に歩み寄りて、殆ど相同じきものとなるであらう。

かくて革新の範囲と程度とは、實際政治家にとりて略ぼ明瞭となつた。それは簡単に要約すれば、ロシアの右、ドイツの左である。吾等は此の範囲及び程度の改革を日本に実現せねばならぬ。最も円滑に、最も迅速に、最も国情に適切に、此の改革を断行することによつて、日本は内外の国難を見事に克服し、世界の先進国として天業恢弘に精進し得るであらう。

## 六 新興団体と神武会

愛国団体の大同団結は、しばしば唱へられ且つ企てられたところである。神武会は此のことについて如何に考へるか。

端的に言明すれば、吾等の観るところに従へば、大同団結は今日に於て不可能である。いま直ちに之を望むは、恰も倒幕以前に廢藩置県を望むに等しい。諸団体が分立するのには、するだけの理由があるからである。人は抽象的な理論によつて集散するものでない。多くの場合、人を集める力は、思想と其の思想を首唱する指導者の人物若しくは性格である。同一思想も、異なる人格を通過すれば、異なる旨趣を發揮される。今日の如く人々の個性が強く發揮せられつつある時代に於て、唯一人にして万民を率ゐることは難しい。それ故にたとへ主義思想の上に大差なくとも人々は成るべく自己の個性に近い指導者を求める。此処に大小の団体が、略ぼ同一なる思想的立場の上に、幾つと

もなく結成され、若しそれが国家改造を目的とするものならば、茲に幾多の改造団体が出来る。

神武会は、此等の改造団体と対立し、競争せんとする意志は微塵もない。吾等は此等の諸団体が、近き将来に於て必ず総連合軍の一隊として、同一目標を目指して進軍するに至るべきを信じて疑はない。それ故に多くの指導者が、各自の力によつてそれぞれの団体を立て、多かれ少かれ国民の力を集結して居ることは、他日総攻撃の場合に動員を容易ならしむるものなるを以て、寧ろ大小団体の結成を喜び、指導者の努力に対して敬意を表する。

上来述ぶるところによつて、略ぼ吾等の志を明らかにした。吾等は神武会の名に適さはしく、天空海潤・万里一碧の心を以て、昭和維新の大業に従ふものである。四方同心の士、希はくは来りて吾等と芳契を結ばんことを。

(昭和七年五月一日「月刊日本」第十六号)

行地社機関誌「月刊日本」は、本八十六号より神武会機関紙(毎月二回一日十五日発行の新聞紙)として継承さる。

## 二重の難局に対する覚悟

集 論 事 時

満蒙問題の徹底的解決とは他なし。満洲と日本とを有機的に一体ならしむることである。而して其のためには日本国内の生活組織を改造しなければならぬ。現実の日本は、台湾・朝鮮をさへも其の生活に組織し得ぬ日本である。従つて満洲国を見事に消化するが如きは、現実日本の到底企及し得ざるところである。かくて満洲問題と国内改造問題とは、徹底して不可離の問題である。

満蒙は、しばしば繰返さるる如く、之を国防の見地からしても、之を経済の点からしても確実に日本の生命線である。この生命線が脅威された故に吾等は敢然として起つて其の脅威の本源たる満洲軍閥を掃蕩した。満蒙三千万の民

衆もまた多年軍閥の虐政の苦しみを嘗め来れるものなるが故に、此の好機に乗じて独立せる新国家を建設し、永久に軍閥再興の禍根を絶ち去つた。而して生れたばかりの新滿洲国は、其の補導者として吾が日本の提擲ていせきを待つて居る。

滿蒙をして日本の生命線たる実を挙げしめるためには、最初に立言せる如く、之を日本の生活に組織化しなければならぬ。そのためには軍事同盟及び經濟同盟を結んで、日本と滿洲国とを有機的に一体ならしめねばならぬ。若し之を能くせずば、滿蒙は遂に日本の生命線たり得ざるのみならず、實に朝鮮—従つて日本の脅威となる。日清・日露の両役は、取りも直さず其のため戦はれたのである。それ故に日本は、万難を排して此の目的を遂げねばならぬ。

然るに日本は、此の目的を遂ふ上に於て、内外二重の障礙に当面して居る。即ち滿蒙を日本の生活に体系化するためには、必然現在の經濟機構と撞着扞格するが故に、之を依持することによつて利益を得つつある階級、取りも直さず財閥と而して政党とが、あらゆる妨害を試みるであらう。彼等は唯だ旧式なる植民政策を墨守し、滿蒙に対して植民地的搾取を主張するであらう。かくすることは暫くの間だけ彼等のみには利益を与へるであらう。而も其の利益は永続すべくもなく、やがて彼等と日本とを共に破滅に導くであらう。故に吾等は先づ此の敵と戦ひ、日本の經濟機構を改造して、内には国民の多数を彼等の搾取より救ひ、外には滿蒙の國民的消化を可能ならしめねばならぬ。

第二の障礙は国外より迫る。それは日本の隆興を喜ばざる列強が、若し日本にして滿蒙を消化するならば國運の勃興極めて可能なるを信ずるが故に、極力その進出を阻止せんとしつつあるが故である。イギリスは、恰も戦前の獨乙が新興工業国として擡頭せるに對すると同様の警戒と嫌惡とを吾國に對して抱いて居る。日本の發展を妨げんとするイギリスの外交政策は、リットン卿が旅先で機嫌を好くすると悪くするに關せず、一貫不変である。アメリカの對日政策が甚だしく非友好的のものなることは言ふまでもない。而してロシヤは、日本の滿蒙進出によつて、その太平洋政策の根底を覆へされることを恐れ、戦争にまで至らざる程度に於て、即ち出先官憲に責任を帯びさせ得る範圍に



於て、吾国の満洲政策を極力防止するであらう。

列強は虎視耽々として常に乗すべき機会を覗つて居る。此の内外の国難は、同時に迫りつつあり、また同時に解決せらるべきものである。吾等は日本の今日が、真に文字通り「非常時」なることを明確に認識し、之に処するの覚悟を一層堅固ならしめねばならぬ。

(昭和七・五・十五日「月刊日本」)

## 満蒙問題の重大性

満蒙問題は今や空前の重大性を帯びて来た。外、国際的圧迫が非常の勢を以て加はらんとするに先だち、内、満洲新国家そのものが動搖不安の状態に陥り、建設の歩みよりも崩壊の歩みが一層急速に進みつつあるかに思はれる。若しも形勢がこのままに推移するならば、誰が此度の満洲事件がまたもや「シベリア出兵」乃至は「山東出兵」の轍を踏まぬと断言し得やう。

満洲問題の適切なる解決は今や日本を内外の難局より救ふ無二無三の途となつて居る。従て其の解決の成否は直ちに国家の運命そのものに影響する。若しも満洲を失ふ如きことあらば、吾国は直ちにロシア・支那・アメリカ三国に圧迫せられ、列強の限りなき輕侮を満身に浴びつつ、永久に浮ぶ瀬もなき小国として、恰もベルギーがヨーロッパに於て占むるが如き隣れなる地位を、辛うじて極東の一角に保ち得るに過ぎぬこととなるであらう。それは断じて吾等の忍び得るところでない。

国民は満洲問題の解決が如何に非常の努力を必要とするかを充分に知つて居ない。吾等は日露戦争に於て、実に二十億の国帑を費し、三十万の生靈を犠牲にして、僅かに満鉄と関東州の租借権とを獲得した。然るに今日は、自国に

二倍する広大な満洲全土に亘りて、その治安を維持し、その統治に助力し、その資源を開発し、三千万の住民に幸福と安寧とを与へつつ、満洲新政府と協力して、一個の楽土を実現せんとするのである。それは非常の事業である。これによつて得らるべき結果は、日露戦争のそれに数倍する偉大なるものである。非常の覚悟と努力となくしては、この大業は成就することは考ふべくもない。

然るに国民は、この大業のために、日露戦争に払へる努力と犠牲の十分の一をさへ払はうとしない。単に之を経費の点だけについて見るも、日露戦争当時の二十億円は、恐らく今日の六十億円乃至八十億円にも当るであらう。当時の国富と国民所得とを以てしても、君国のために屹度必要であると覚悟すれば、それ程の無理算段も出来たのだ。それであるのに今日は、満洲問題のために費された軍事費以外、一億の金さへも出そうとしない。嘗て予の談話筆記が某雑誌に発表されたが、そのうちに予が満洲開発のためには、三十億円以上の資金を投ぜねばならぬと言へるに對し日本論壇の雄として日頃尊敬して居る若宮卯之助翁さへ、極めて冷笑的なる批評を加へたことがある。其他の人々の見識推して知るべしと言はねばならぬ。日本の国富は、内閣統計局の調査で大正十三年末に約一千億円、これは今日と雖も減じて居る筈がない。国民所得は大正十四年に約百三十億円と推算されて居り、これは若干の減収ありとするも、尙ほ百億円内外と見て宜からう。三年間に三十億円を支出するとすれば、国民所得の一割にしか当らない。これをソヴェート・ロシアが国民所得の四割を取立てて五ヶ年計画の遂行に充たしつゝあるのに比ぶれば毫も驚くに足りない。

日露戦争によつて得たものより、幾層倍も偉大な結果を収めるのに、その十分の一にも足らぬ努力で目的を達し得るか如く考へて居ることが、実に満洲問題に對する吾国の根本的なる心得違ひである。左様なことは決して有り得べからざることである。個人と言はず民族と言はず、努力と犠牲の大小に依じて收穫にも大小がある。言ふに足らぬ

努力と犠牲とを以て、莫大なる結果を擱まうとするが如きは、天人俱に許さぬところである。日本は直ちに此の根本的なる心得違いを改め、日露戦争以上の緊張と覚悟とを以て、満洲問題の解決に当らねばならぬ。この問題の徹底せる解決のみが、能く日本を当面の経済的窮境より脱却せしめ、能く天業を恢弘する礎を築くことを得せしめる。国民の金鉄の如き決意を要求する所以である。

(昭和七年六月十五日「月刊日本」)

## 神武会解散の辞

花は開き花は落つ。開落ともに任運法爾である。いま神武会は梅花の如く咲き、梅花の如く散る。咲くべくして咲き、散るべくして散る。古語に曰く、梅花は霜雪の先、花は猶風雨の後と。神武会の解散は即ち百花繚乱の春に先駆するものである。

大 川 周 明